

紹介

近年の中國古典文學研究に關する一見解

張 伯 偉

南京大學

稻垣裕史 譯

京都大學

近代だけ眺めても、中國古典文學の研究はすでに百年の時を経てゐる。研究の現状に向き合うとき、如何なる問題が検討に値するのかわ、その感じ方は人さまざまであらう。そこでこの場を借り、いまだ煮詰まらぬ私見を述べて、國內外の同學と意見交換をしてみたい。各位の御批判と御指正を仰ぎ、「舊學」商量すれば加ます濶密にして、新知培養すれば轉た深沈たり」（朱熹「鵝湖寺和陸子壽」詩、「晦庵集」卷四）となれば幸いである。

紹介

歴史的にみれば、學術の發展は循環の過程である。漢代には經書の注釋が十分に發達し、ともすれば一經を論ずるのに數百萬言を費やして、煩瑣の極みであつた。このため魏晉になると、玄學が「意を得れば言を忘る」を主張した。湯用彤氏の表現を借りれば、王弼はいわゆるオツカムの剃刀 (Occam's razor) を使って蕪雜な漢學に大鈍をふるつたのである。これがいわば最初の大きな「消化」であつた。しかし、そうなれば消化不良から徐々に榮養失調とならざるを得ない。インドの佛教學がどつと傳來し、多くの翻譯大師が出現して大量の文獻を蓄積したのはこの頃であつた。蓄積が多くなればまたも消化不良をもたらす。そこで禪宗が現れ、厄介な文字を一掃した。その刺激と影響を受けて宋儒はもつぱら心性について講究したが、講究しすぎてやはり空疎に流れてしまい、いま一度實證的な學問によつて挽回しようとする。清代に入ると、乾嘉學派が「實事求是」「徵無くんば信ぜず」を主張した。經學ひとすじ幾十年、學術と現實とは日増しに乖離していったため、康有爲らが經世致用の學問を新たに打ち出し、その影響は五四期

まで續いた。消極的な見方をすれば、ここ百年の中國學術は消化不良でもあり、榮養失調でもある。學術の循環は、禪宗の語録にいう「藥病相^あい治す」(『臨濟錄』)に似ている。藥は病を治すものであるが、治れば必要ない、よつて逆説的に言えば病もまた藥を治すものである、という意味である。中國古典文學研究の現状は、榮養不良なのか、それとも消化不良なのか。

筆者が數年前にこの問題を提起したときには榮養失調のほう^②が由々しく思われた。はたして現在、この狀況に變化はあるのだろうか。悲觀的な見方かもしれないが、以下の二つの原因により事態はさらに悪化したようである。

第一に、學風の問題。この問題はすでに中國學術界で大きな注目を集めており、學術會議ではほぼ毎回、憂うべき學風について批判がなされている。學風の問題が取り沙汰される原因として、もちろん學者個人の資質の變化があるのだが、より重大なのは學術制度である。近年の中國學術は、表面上は非常な活況を呈し、その成果はまさに汗牛充棟、かつては「十年一劍を磨く」と教えられたものが、

現在はともすれば「十年十劍を磨く」といった狀況である。昔は百冊讀んで一冊の本を書いたのだから、今や一冊讀んで十冊書くこともあり得るだろう。こうした見せかけの活況は『華嚴經』にいう「彌勒の樓閣」のようなもので、一見壯麗でも、そのじつ空虚に等しい。このような學術成果は「多くて滾^くせとぶ」ものであり(譯注：「多而滾」は清朝の皇族多爾袞のもじり)、眞の學術的蓄積にはなり得ない。

第二に、電子テキストの問題。これは二十世紀末に登場した傳達・閲覽の新しい形式である。かつては論文を書き資料を捜すには、長い時間をかけて大量の文獻に目を通す必要があつたが、今やいくつかのキーワードを入力しさえすれば、關係資料が瞬時に眼前に列擧される。もちろん研究者の時間を大幅に節約してくれるから、電子テキストの利用を拒む者はめつたにない。しかし、この方法は新たな問題をももたらした。利用者は思はず知らず、檢索時の閲覽を讀書の代用に行っているのである。第一の問題と関連するが、これは「多く快^はく好^うに省^せく」論文を濫造するのに一役買っている(譯注：「多快好省」は新中國における標語の

一つ。そうした論文の引用する資料は見たところ豊富だが、常に二つの問題をはらんでいる。ひとつはテキストの正確さである。電子テキストには作成時に生ずる誤謬が付き物であり、より踏み込んだ校正が必要だが、慌ただしい現代人にはその餘裕がない。ふたつめは、引かれる資料は多いが、資料間の関連性に乏しいことがよくある。ひとつの文章に列擧されてはいるけれども、いわば烏合の衆であるから、問題を理想的に説明・解決することはできない。このように眺めてくると消化不良のようだが、本を正せばやはり榮養失調なのだ。

では、これらの問題をいかに解決すべきか。思うに、新しい意義において傳統學問の方法へ回歸すればよい。電子テキストは必要な資料に素早く當れるようにはしてくれる。しかし収集した資料は、それを本来の上下の文脈へ戻し、じっくりと読み解いてやらねばならない。これが朱熹の讀書法であった。『朱子語類』卷八「總論爲學之方」に次のごとくいう。

學問をする人の勉強は、たとえば丹藥の精製であつ

紹介

て、大量の炭火でひとしきり炊いて、頃合いになったらとろ火で熟成して完成させなければならぬ。今の人は大量の炭火で炊こうともせずに弱火で熟成しようとするけれども、どうして出来るものかね。

さて學問といえば、ちようど物を煮るようなもので、まず強火をおこして煮て、そして弱火でゆっくり煮込む。ずっと弱火ばかり使っているのは、どうして煮えるものかね。

たとえば藥を煎するとき、まずは強火で煎じて、がらがらと沸かし、藥效成分が染み出して來たら、その後ゆるい火で煮詰めてやればよい。

まずい喩えをするなら、電子テキストによって集めた資料を上下の文脈に戻して通讀するのは、ちようど朱子のいう「強火」でまず煮込むのにあたる。そして資料の要の部分[△]を熟讀玩味するのは、朱子のいう「弱火」でゆっくり熟成させるのにあたる。朱子の主張は前者に重心が置かれているようだが、今日の中國古典研究者にとって重要なのは後者に他ならない。

なぜこのように言うのかといえば、半世紀にわたる中國の文學研究を回顧するに、五十年代に強調されたのは階級闘争と文學の人民性であった。それは「政治的基準が第一」から「政治的基準が唯一」まで擴充された。六十年代の初めには文學そのものに對する研究がなされ、美學の方面でも自然美に關する討論が行われたりもしたが、好ましい狀況は長く續かず、文化大革命が始まった。文學は、「革命裝置全體の構成部品のひとつであり、人民を團結させ、人民を教育し、敵を撃ち、敵を滅する有力な武器とな」り（毛澤東「在延安文藝座談會上の講話」、文學研究も完全に政治闘争の道具になつてしまつた。「武訓傳」「海瑞罷官」や『水滸傳』をめぐる議論がまさにそれである。八十年代に入り、學術界は「文革」の悪夢から目覺める。文學研究においては、文學自體の特徴を尊重し、文學を文學として研究することが強調されはじめた。八十年代中期になると、「方法論」ブームが學術界を席卷する。「新しい方法」（實際には自然科学でいう「システム論」「情報論」「制御論」の、いわゆる「三論」）を用いて人文學を研究すること

が謳われ、古典文學もその例に洩れなかつた。これに續いたのが「カルチャー・ブーム」である。文化的背景から文學的現象を解釋しようとするものだが、「文化」の概念はほとんどあらゆるものを包括し、際限を定めがたい。率直に言えば、自然科学の方法論を用いた文學研究は現在に至るまで確立されていない。一方、政治・制度・宗教・學術、そして文人の精神生活など、文化的背景からの研究は確かに大きな成果をおさめており、近年の各大學における古典文學専攻生の博士論文について調べてみれば、この種の題目がいまなお最も突出している。以上のごとく駆け足で回顧してきた學術史に、我々は何を見いだすだろうか。それは文學自體が、文學研究の中で主導的地位を占めていないという事實である。今日の文學研究における最大の缺點は、文學的現象からますます離れ、それによつて文學の本質からますます遠ざかつていることに他ならない。この半世紀、學術界は國外（五十年代はソ連、八十年代以降は歐米）から絶えず新しい理論を輸入するのに熱心である。それは専門用語・概念・方法などを含め多様に變化し、陸續として盡き

ることがない。積極的な意義から言えば、これらは伝統的な研究方法の不足を補うことができる。しかし、文學的現象そのものを離れてしまえば、理論をめぐる議論は概念上のゲームに陥ってしまう^③。文學研究者の中には、文學作品をめつたに讀まない、ないし全く讀まない者がいる。また作品の背景を研究するのに執心なあまり藝術的感得をないがしろにし、その能力を徐々に失ってしまった者もある。

こうした現状を純粹學術の立場から言い換えるならば、今日の古典文學研究が面しているのは唯理性主義と唯科學主義からの挑戦であるといえる。そしてその解決策は、文學そのものに立ち返り、文學作品をじっくり讀み解くことにあると筆者は考える。

唯理性主義の文學研究における特徴は、抽象概念と理論に依據しすぎることである。この缺點については國內外を問わず批判があり、多くの學者が文學理論の誕生と發展、および實際の文學作品との間には密接な關係があると主張している。前世紀の六十年代、アメリカのルネ・ウェレック (Rene Wellek) は「文學理論・文學批評・文學史」の中

で次のように指摘している。

文學理論・文學原理・文學基準は、「眞空の中」に歸着することはありえない。歴史上の批評家はみな……具體的な藝術作品へ接近しつつ、その理論を發展させてきた。ひとりの批評家が持つ文學的見解、作品に對する評價、その優劣の判断は自身の理論によつて補強され、確認され、發展しなければならぬ。そしてその理論もまた作品の中から引き出され、作品によつて支持され……ることと説得力を持つ^④。

八十年代、わが師程千帆もまた、古典文學研究における「兩條の腿」で走路あるいふく方法を説いている(譯注:「用兩條腿走路」は新中國における標語の一つ)。

理論の側から古典文學を研究するには、二本の足で歩いてゆかねばならない。ひとつは「古代の文學理論」、ふたつめは「古代文學の理論」である。前者は現在の學者が力を入れて取り組んでいるもので、主に古代の文學理論家の作物を對象としている。後者は古人が力を入れて取り組んで來たもので、主に作品を研

究し、作品から文學の法則と藝術の方法とを歸納する。^⑤
兩氏の見解は共通しており、今なお學界の木鐸たるに足る。

唯科學主義の文學研究における特徴は、研究の「科學化」に力を注ぐことである。八十年代中期には自然科学の方法論を用いた研究が試みられたが、これは失敗に終わった。そして九十年代以降、中國古典文學研究において文獻資料がおろそかにされているとして、「實證」的な方法が強調される。これが良い傾向であるのは疑いを容れない。しかし、こうした研究にも偏向はひそんでいる。唯科學主義は、文學の「技術化」に重きを置くからだ。文學批評における「唯科學」の起源は古く、中國では宋代まで溯る。その特徴は、實證主義の態度をもって文學的形象に臨むところにある。宋人詩話に、よく知られた二つの議論がある。ひとつは、張繼「楓橋夜泊」詩、「姑蘇城外 寒山寺、夜半の鐘聲 客船に到る」をめぐる議論である。歐陽脩は、三更は鐘をつく時刻ではないと考え、「理として通ぜざる有り、亦た語病なり」(「六一詩話」とした。一方、この詩の肯定派は、夜半に鐘をつく事實は確かに存在すると主張

している。ふたつめは、杜甫「古柏行」の「霜皮 雨を溜らす四十圍、黛色 天に參ず二千尺」をめぐる議論である。沈括『夢溪筆談』卷三三は、四十圍を二千尺に組み合わせたのでは木があまりに細長すぎる、とした。一方、黃朝英『緇素雜記』は沈括の説に反駁し、杜甫の用いたのは昔の尺貫法であるから、「則ち徑四十尺、其の長二千尺なるは宜なるかな。豈に太だ細長なるを以て之を譏るを得んや」(『茗溪漁隱叢話』前集卷八引)と述べている。このような文學世界を現實世界に等置し、史學の方法を文學の方法に置き換える傾向は、現代においても絶えてしまったたわけではない。文化的背景の研究で十分と考えたり(例えば「紅樓夢」研究における「曹學」、現實世界(文化的背景)と作品世界とを混同したりしては文學研究の自己異化に行きつくのが關の山で、藝術作品を歴史上の化石とみなすのに等しい。ヨーロッパで十九世紀に文學研究において流行した唯科學主義は、二十世紀半ばにおいても様々な表れ方をしている。ウエレックは「近年のヨーロッパ文學研究における實證主義への反抗」において、次のように指摘

している。

ひとつは、客観的に處理し、個性を交えず、確證性を備えるという科學の一般的な理想にならおうとするもの。つまり科學以前の事實尊重主義を支持する立場である。そして、自然科學の聲みに倣い、系譜と起源を研究するもの。あらゆる關係性について、時系列のなかで可能なかぎり追跡するのを旨としている。さらに嚴めしいやり方は、經濟的・社會的・政治的な要因を見きわめ、科學の因果律によつて文學的現象を説明しようとするもの。なかには統計・圖表・グラフなど、科學でいう定量分析法を導入しようとする學者さえある。最後は、生物學の概念を用いて文學の發展をたどる、最も野心的な一派による一大實驗である。……誤解を恐れず言えば、今日のアメリカや他の地域に、その遺風はいまなお滞っている。^⑥

唯科學主義はしばしば文學研究の「技術化」を尊ぶ。こうした研究は文學的現象から離れてはいないし、なかにはニュー・クリティシズムのように、テクストの獨立性を掲

紹 介

げてその客観的意義を追求し、形ある言語・意象・象徴の分析を通じて批評の客観基準をうち立てようとするものさがある。しかし實際には、それらも唯科學主義の産物である。文學研究の客観化（科學化、と美稱されることもある）を追求するいかなる試みも、すべては文學の本質から遠ざかっている。

ウェレックは、次のように述べている。「文學研究が歴史研究と異なるのは、扱うべき對象が文獻ではなく、不朽の作品であるところだ」と。^⑦ 古典文學研究について言うならば、「扱うべき對象が文獻のみにとどまらず」と言い換えてやる必要があるかもしれない。歴史文獻に對する考證の必要性は疑うべくもないが、それは文學研究における外在的な障壁を取り除くための作業に過ぎない。眞の文學研究とは、その基礎から進んで「文を披ひらいて以て情に入」〔「文心雕龍」知音篇〕らねばならない。文學創作は感情の波が外面化されたものであり、眞の文學には作家の生命の躍動が必ず内包されている。ならば、眞の文學研究も純粹な理知の活動ではあり得ない。王褒「四子講德論」〔「文

選」卷五二)に、「詩人は感じて後思い、思いて後積み、積みて後滿ち、滿ちて後作る」とある。唐人の顧非熊の詩に、「情有り天地の内、多く感ずるは是れ詩人」(落第後贈同居友人)、『全唐詩』卷五〇九)とある。創作がこうしたものであるならば、文學・藝術における實際の批評のうち、作品に對する感じ方、つまり「文を觀れば輒ち其の心を見る」(『文心雕龍』知音篇)、「封を披き迹を觀る、欣ぶこと會面するが如し」(張懷瓘「書斷序」)などは、單に鑑賞の起點であるのみならず、同時に研究の起點でもある。「詩人は感じて後思い、思いて後積み、積みて後滿ち、滿ちて後作る」も、詩人の精神状態を描寫するだけでなく、同時に批評家の精神状態を描寫している。このようであつてこそ、眞實を探し、衆人を驚かす深みを湛え、心を傳えることができるのだ。

文學そのものに話を戻すと、作品をじっくり読み解くことは作品と作者に對する尊敬を意味する。元好問「張仲傑郎中と文を論ず」詩にいう。

文章は苦心に出ずるも、誰か苦心を以て爲らんや。

正に苦心有る人の、世を擧げて幾人をか知らん。……
文は須く字字作るべく、亦た字字讀むを要す。咀嚼して餘味有るや、百過するも良に未だ足らず。(『遺山詩集』卷二)

これは中國の文學批評の傳統を代表するもので、より古典的な言葉でいえば「意を以て志を逆う」(『孟子』萬章上)である。こうした文學批評はある種の態度を示している。つまり、讀書のなかでまず作者の心の呼び聲に耳を傾け、その理解を作品評價の前提としている。このような他者の作品を借りて個人的感想を述べるありかたは、その言葉がどれほど華麗で感動的であろうと、そのじつ文學作品そのものとは關係がない。よつて、文學そのものに立ち返り、研究においてテキストに重要な地位を與えるには、新たな意義の上で中國文學批評の抒情の傳統へ回歸する必要がある。閑堂(程千帆)先師は晩年の講演で次のように述べている。

胡小石先生は晩年、南京大學で「唐人七絶詩論」を教えていました。先生の講義がどうしてあんなに上手

だったのかといえ、自分の心を使って唐人の心に觸れていたからです。心と心が通じ合うというのはひとつの精神的交流であつて、『通典』何卷、『資治通鑑』何卷といった冷やかな資料に記録できる感覺ではありません。今でも覺えています、當時の胡先生の心情と態度はこのような状態にあつて、私には學問が進むまで分からないことでした。^⑧

そして閑堂先師自身の研究もまた、この傳統を自覺的に繼承している。

感動から理解へ、理解から判斷へと進むこと、これは文學研究の整つた過程である。……個人的な經驗から言えば、私はふつう、作品および作品の構成するある種の現象に心を打たれてようやく、それをはつきりさせるために熟考を重ね、それが結果として文章とな^⑨る。

この議論は沈思に値するだろう。

二〇〇二年八月に開かれた「中國比較文學學會第七屆年會暨國際學術研討會」において、國際比較文學學會主席

紹介

の川本皓嗣 (Koji Kawamoto) 氏は、次のように力強く述べられた。

文學およびその研究は、世界のある地域においてはまさに停滞期にあるようです。しかし文學は精神を奮い起こし、最後には活力を取り戻すだろうと確信しております。こうした活力がどういった形で現れてくるのであれ、人を感動させ、他者への同情と共鳴をあらわにし、また言葉に對する洞察力をあらたに搖り起こすなどの方法を通じて、實現されるでしょう。^⑩

文學研究の側から見れば、彼の掲げた見通しはまさに作品を中心とした抒情的批評の展開である。

何年も前のことだが、朝鮮時代後期の思想家・李恒老 (一七九二—一八六八) の『華西先生文集』を讀んだおり、そのうちの一篇に非常な感銘を受けた。彼は「李長汝に答う」の中で次のように述べている。

夫れ四海の蒼生、皆な吾が同胞の物なり。今の凍餒して盡くるに垂んとし、流離散亡するを見るに、擧げて皆な溝壑の中に骸を暴し骨を露わにす。彼れ皆な

晝宵に勤動し、手口共に作し、暫しも安息せず、身に完き衣無く、體に完き肉無し。凡そ以て君長を養いて鬼神に享する所の者、皆な此輩の血より出づ。而るに一たび此に至ること、何ぞ其れ慘たるや。今也、明窗斐几に、安坐して憂い無し。職とする所を問わば、文字を讀み、道理を講ずるの、才かに一事に過ぎざるのみ。此に於て又た心を盡し力を竭して做すを肯んぜず、一毫の閑歇に悠泛するの意思有りて在り。豈に怵惕惻隱の本真に蔽わるる有りて、推廣充養の實力に得る無きに非ざるや。願わくは座下 常に此の念を著して肚裏に在らしめ、理を看ること自ずから切ならざるを得ず、力を用うることに自ずから勤めざるを得ざらんことを。

李恒老の批判は當時の朝鮮の學者に向けられている。明末清初の顧炎武も、當時の中國における南北の學者を批判し、ある者は「飽食すること終日にして、心を用うる所無く、ある者は「群居すること終日にして、言は義に及ばず、小慧を行うを好む」(『日知錄』卷二三「南北學者之病」と述べ

ている。今にち經濟のいまだ充分に發達しない中國には、苦しい生活を強いられている民衆がまだいくらかもある。一方、學術研究者が享受しているのは「明窗斐几に、安坐して憂い無し」であり、従事しているのは「文字を讀み、道理を講ずるの、才かに一事に過ぎざるのみ」である。それでいてなお「心を盡し力を竭して做すを肯んぜ」ず、怠りかつ焦り、顧炎武に批判される者たちのようであるとすれば、天地に愧ずるの感なしには濟まされない。近年の中國古典文學研究について思いを巡らせつつ、自らを省みるに及んで、以上のような感想を得た。ここに淺薄を顧みず、腹藏なく申し述べ、各位の御教授を賜りたい。

註

- ① 湯用彤「魏晉玄學與文學理論」、『理學・佛學・玄學』三一頁、北京大學出版社、一九九一年版。
- ② 張伯偉「古代詩論研究中的文獻學問題」、『中國詩學研究』三一—〇頁、遼海出版社、二〇〇〇年版。
- ③ この點については、すでに中國文學研究界で反省がなされている。「二十一世紀中國文學研究面臨的挑戰——『新世紀文學學術戰略名家論壇』綜述」、『文學評論』二〇〇〇年第一

期を参照。

- ④ “Literary Theory, Criticism, and History”, *Concept of Criticism*, PP.5-6, Yale University Press, 1963.
- ⑤ 「古典詩歌描寫與結構中的一與多」張伯偉編『程千帆詩論選集』四四頁、山西人民出版社、一九九〇年版。
- ⑥ “The Revolt Against Positivism in Recent European Literary Scholarship”, *Concepts of Criticism*, PP.257-258.
- ⑦ “Literary Theory, Criticism, and History”, *Concepts of Criticism*, PP.14-15.
- ⑧ 「兩點論——古代文學研究方法漫談」張伯偉編『桑榆憶往』所收、『程千帆全集』第十五卷一七九頁、河北教育出版社、二〇〇〇年版。
- ⑨ 「答人問治詩」張伯偉編『程千帆詩論選集』一八頁。
- ⑩ 川本皓嗣「開胃抑或倒胃：東方視角下的文學理論」(“Orelic or Anorectic: Literary Theory from an Eastern Perspective”)、秋葉摘譯、汪介之・唐建清主編『跨文化語境中的比較文學』一九頁、譯林出版社、二〇〇四年版。